

Title	ヨーハン・ ヴォルフガング・ ゲーテ『ヴィルヘルム・ マイスターの 遍歴時代,あるいは諦念の人々』初稿 (1821年): 翻訳の試みと覚書 (8)
Sub Title	J.W. Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden (I. Fassung). Übersetzung und Anmerkungen (8)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.66 (2025.) ,p.51- 65
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	七字眞明教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Masaaki Shichiji
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20250331-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、
あるいは諦念の人々』 初稿（1821 年）
——翻訳の試みと覚書（8）——

山 本 賀 代

試訳¹⁾

第 14 章²⁾

完全には明らかにできない不確かさが残るものの、ここで私たちは再び、
ある程度信頼のおける情報として地名を特定できる、確かな領地に足をふ

- 1) 翻訳の底本には Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] の Bd. 10: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhard Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し、同書の詳細な解説・注釈とともに Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] の Bd. 17: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を常に参照した。今回訳出した範囲は FA10, S. 164–174。脚注には主として 2 稿との異同（訳文中で明示可能な異同にはアンダーラインを引いている）を記した。ただし引用符の有無、句読点の変動や正書法の修正・変更、さらに内容に影響のない表現や構文上の変更については詳細を省略した場合もある。以下、作品名は『遍歴時代』と略す。

- 2) 2 稿の第 3 巻第 1 章と第 6 章冒頭に対応している。

み入れる。

ヴィルヘルムは、最初の矢印が示していたルートに³⁾ どこかの地点で到達するため、陸地を横ぎって進んでいかなければならなかったので、旅は徒歩で行ない、荷物はあとから運ばせる必要があった。しかしこの徒歩旅行のおかげで、彼は一歩進むたびにたつぷりと報われることになった。たいそう快適な地区に思いがけず出くわしたのである。それは山地が終わって平地に向かって開けた地方で、灌木の生い茂る丘陵があり、なだらかな斜面は上手に活用され、平地は一面に緑で、険しいところ、不毛なところ、耕されていないところはどこにも見あたらなかった。ちょうど彼は川の支流がいくつも流れこむ谷間の中心に到着した。この土地も丁寧に耕され、見わたす眺めは心地よく、すらりとした木々が、この地を貫流する川とそこに流れこむいくつもの小川の曲線をなぞっていた。ヴィルヘルムが道しるべとしている地図を取りだしてみると、引かれた線はちょうどこの谷を横断しており、つまりさしあたり彼は自分が少なくとも正しい道を進んでいることを知り、不思議な気持ちになった。

時代ごとに修復されてきたおかげで保存状態のよいひとつの古城が、灌木に覆われた丘の上に建っていた。丘のふもとには活気のある町が広がり、前面にある一軒の宿屋がまず目に入ってきた。彼はその宿屋をめざして歩きだし、宿の主人に愛想よく迎えられたが、主人は、ある団体の許しがないければ泊めることはできないと言って詫びた。この団体が宿全体をしばらくの期間、借りきっているため、他の客たちにはみな、上のほうにあるもっと遠くの古い安宿に行ってもらわなければならないというのである。この男は考えこんでいる様子だったが、しばらく話しあった末、次のように言った。

- 3) 2 稿とは冒頭の描写が異なる。2 稿では、直前の第 2 巻最終章（「ヴィルヘルムからナターリエへ」）で、読者はヴィルヘルムが結社の一員として有用な人間になるため、外科医の専門教育に入ったことを知らされる。第 3 巻第 1 章の冒頭は、専門教育を終えたヴィルヘルムが、アベから送られてきた仲間たちの居場所を示した表（第 2 巻第 7 章）を頼りに結社に合流しようとして旅を続けている様子から始まる。

「今は誰もいませんが、今日は土曜日ですから、世話役がまもなく帰ってこられるでしょう。その方が毎週すべての清算をされ、次回の注文をなさるのです。本当に、あの方々のあいだにはしっかりした秩序があり、金銭に細かいところはありますが、彼らとのおつきあいは快適です。大きな儲けにはなりません、確実な収入を見こめますからね。」こうして彼は新来客に、上階の大きな待合室でこの先のなりゆきをがまんして待つように言った。

中に入ると、そこは広い清潔な部屋で、いくつかの長椅子とテーブルのほかには何もなくながらんとしていた。それだけに、ある扉の上にひとつの大きな板が取り付けられているのを見て、おやと思った。そこには金文字のラテン語で „Ubi homines sunt modi sunt“ と記されているのが読めた。ドイツ語で説明すると、人間たちが集まって集団を作れば、共同生活を続けていくための様式がすぐに形づくられる、という意味である。この箴言を読み、私たちの遍歴者は考えこんだが、これまでの人生で度々、理性的で役にたつとみなしてきたことがここに断言されていると考え、この言葉を吉兆と受けとることにした。まもなくして世話役が現れた。彼は宿屋の主人からあらかじめ話を聞いていたようで、あれこれ問いただすこともなく、短い話しあいの後、次のような条件でヴィルヘルムを受け入れた。3日間滞在すること⁴⁾、何が起ころうとも、落ち着いてすべてに参加すること、何が生じようともその理由を尋ねないこと、別れの際に飲食費を聞かないこと。これらすべてを旅行者は受けいれなければならなかった。代理人としてはいかなる点も譲歩するわけにはいかなかったのである。

世話役がちょうどその場を離れようとしたとき、歌声が階段から響いて

-
- 4) 2稿でもそのまま残されているが、おそらく削除するのを忘れたのだらう。初稿では、最終章まででヴィルヘルムはちょうど遍歴組合のもとで3日間を過ごしたことになる。一方、2稿の場合、3日以上同じ場所に留まってはならないというヴィルヘルムに課せられた遍歴者の掟は、すでに第2巻第7章で免除されているので、3日間という数字にこだわる必要はなく、実際に2稿ではこの後、3日以上時間が経過することになる。

きた。二人の感じのよい若者が歌いながらのぼってきたのである。世話役は彼らに簡単な合図をして、この客が迎え入れられたことを理解させた。二人は歌うのをやめることなく、愛想よくヴィルヘルムに挨拶をした。その優美な二重唱からは、彼らが十分な訓練を積んで一流の技をもっていることが容易に察せられた。ヴィルヘルムが非常に注意深く関心を示していると、若者たちは歌うのをやめ、徒歩で旅をしていると、あなたにもふと歌が思いうかび⁵⁾、一人で口ずさむようなことはないかと尋ねた。「生まれつき私は」とヴィルヘルムは返事をした、「よい声に恵まれてはいないのですが、心のなかでは頻繁に正体不明の精霊が私に何か韻律的なものをささやきます。それで歩くときの私はいつも拍子をとった動きになり、それと同時にかすかな調べが聞こえてくるように思われます。その調べが、どういうわけか偶然に思いうかぶ歌の伴奏をしてくれるのです。」

「そのような歌のひとつを覚えていらっしゃるなら、私たちに書いてくださいませんか」と若者たちは言った、「私たちがあなたの歌の精霊に伴奏をつけられるかどうか、やってみましょう。」そこでヴィルヘルムは日記帳から一枚の紙を取りだし、二人に次のような歌をゆだねた。

山から丘へ

さらに下って谷間に沿えば

そこに響くは翼にのった

ゆらりさまよう歌の声。

疲れを知らぬ衝動に

続け喜び、続けよき知恵。

汝の努力は愛にこそあれ、

汝の人生は行為であれ。

少し考えただけで、すぐさま旅人の足どりに似合いの楽しい二重唱が響

5) 2 稿では manchmal が追加される (ebd., S. 589)。

きだした。歌はくり返され、からみ合いながらどこまでも続き、聞いているヴィルヘルムの心を奪っていった。これが彼自身の旋律、彼のもともとの主題なのだろうか、それとも今、初めて他のどんな動きも考えられないほど相応しい旋律を得たのだろうか、彼には答えが出なかった。歌い手たちがしばらくの間このように楽しげに歌っていると、二人のがっしりした若者が近づいてきた。彼らは持っている道具からすぐに左官とわかったが、彼らのあとからさらに来た二人は大工としか考えられなかった。この四人は仕事道具をそっと下ろし、歌に耳を傾けていたが、やがて自信をもってきっぱりとその歌声に加わったので、まるで遍歴の集団一行が山を越え谷を越えて近づいてくるように感じられた。ヴィルヘルムはこれほど快適なもの、心と感覚を高めてくれるものを聞いたことがないと思った。しかしこの楽しみがさらに高まり最高潮に達しようとしたとき、一人の巨人のような姿が、どれほど努力してもその力強いどっしりした足どりをおさえきれずに階段をのぼってきた。たっぷり荷物を積んだ背負いかごをすぐに部屋すみに置くと、彼はベンチに腰かけた。するとベンチがめりめりと音をたて、それを他の人々は笑ったが、歌をやめることはなかった。しかしヴィルヘルムが非常に驚かされたのは、恐ろしい低音の歌声で、巨人族アナクの子孫のようなこの男が同じように歌に加わりはじめたときであった。広間が震え、そして意味深かったのは、この巨人が自分のパートでリフレインを変更し、次のように歌ったことである。

人生で何ひとつ先に延ばすな
 汝の人生は行為につぐ行為であれ！

さらにすぐに気づいたことには、彼はもっとゆっくりした歩調に合わせて速度を落とし、他の人々を自分に従わせた。ついに歌が終わり、誰もが十分に満足した。人々は、みなを惑わせようとしたかのようにだと巨人を非難した。「とんでもない！」と彼は叫んだ、「君たちこそばくを惑わせようとたくら

んで、ぼくの足どりをずらそうとしているじゃないか。荷物を背負って山を登り下りし、しかも最後は決められた時刻に到着し、君たちを満足させるというのなら、ぼくの足どりは適度で確実にでなければならないのにさ。」

それから一人ずつ世話役の部屋に入っていった。清算が目的だろうと察しがついたが、ヴィルヘルムはそれ以上事情を知りたがるわけにはいかなかった。そのあいだに二人の快活で美しい少年がやって来て、てきばきと食卓をととのえ、ほどよく食べ物やワインを並べた。そして部屋を出てきた世話役が、一緒に席につくようにとみなを招いた。少年たちは給仕をしたが、おのれのことも忘れずに、立ったままその分け前をとった。ヴィルヘルムは、まだ俳優たちと暮らしていた頃に経験した似たような場面を思いだした。しかし彼には現在の集まりのほうがずっと真面目で、冗談や見せかけではなく⁶⁾、意義ある人生の目標をめざしているように思われた⁷⁾。

職人たちと世話役との会話がヴィルヘルムにこのことをはっきりと教えたのである。四人の有能な若者たちは近所で活動していた。そこは大火災によってたいそう感じのよかった田舎町が焼きつくされてしまっていた。さらに聞いたところでは、実行力のある世話役は木材やその他の建築材料の調達に尽力しているそうである。こうしたことは、ここにいる全員が土地の人間ではなく、すべての点において通りすがりの遍歴者にしか思われない⁸⁾ため、ヴィルヘルムにはますます謎めいて感じられた。食事の終わりに、聖クリストフ——例の巨人はそう呼ばれていた——はよけてあった上等なワインを一杯、寝酒用に取りにいった。そして朗らかな歌声がなおしばらく、すでに散り散りになっていた仲間たちの心をつなぎ留めていた⁹⁾。その後、ヴィルヘルムは非常に快適な位置にある一室に案内された。

6) 初稿では aus Scherz, zum Schein, 2 稿では zum Scherz auf Schein (ebd., S. 591.)。

7) 初稿では gerichtet zu sein, 2 稿では zu sein が削除されている (ebd.)。

8) 細かい表現の違いがあるが内容に変更はない (ebd.)。

9) 2 稿では「そして朗らかな歌声が、目にはすでに (dem Blick bereits) 散り散りになっていた仲間たちをなおしばらく耳に (für das Ohr) つなぎ留

豊かな畑を照らしながら満月がすでに昇っていて¹⁰⁾、私たちの遍歴者の胸に、これに似た同じようなさまざまな追憶を呼びました。愛する友たちすべての霊が彼の心をよぎっていった。とりわけレナルドーの姿が鮮明によみがえり、目の前に見る思いがした。こうしたすべてが彼の心をくつろがせ夜の安眠に誘ったが、そのときなんと奇妙な音が聞こえてきて、彼は驚愕せんばかりであった。それは遠くから響いてはいるが、建物の中で起こっているらしかった。というのも家がときおり振動し、その音がもっとも強くなるとき、梁まで鳴動したのである。ふだんはどんな音も聞きわけける繊細な耳をもつヴィルヘルムも、このたびは何の音とも決めかねた。彼はその音を、大音量すぎて一定の音を出すことができない大きなパイプオルガンのうなる音にたとえてみた。この夜の驚愕も明け方には和らいだのか、あるいはヴィルヘルムが徐々にこの音に慣れてもはや敏感さを失ったのか、つきとめることは難しい。とにかく彼は眠りこみ、昇る太陽に気持ちよく起こされた¹¹⁾のであった。

給仕の少年の一人が朝食を運んでくると、すぐに一人の人物が部屋に入ってきた。昨日の夕食で目についていたが、どのような人物なのかは明らかでなかった。立派な体格で肩幅が広く、しかも敏捷な男だった。引っぱり出した道具から理髪師であることがわかり、彼はヴィルヘルムにこの願ってもない奉仕を行なう準備をした。それにしても彼は無口で、何か一言でも自分から発することはなく、非常に軽やかな手つきで仕事はすべて終わった。そこでヴィルヘルムから話しはじめた。「あなたは卓越した腕前をお持ちですね。これまでに今日以上に柔らかなナイフを頬に感じたことはありません。同時に、あなたは団体の規則を厳密に遵守されているように思われます。」

いたずらっぽく微笑んで指を口に当てながら、この寡黙な男はそっとド

めていた」に変更 (ebd.)。

10) herauf の意味で使われている heran から 2 稿では herauf に変更 (ebd.)。

11) 初稿では aufwecken, 2 稿では erwecken (ebd., S. 592)。

アから出ていった。「絶対に！」とヴィルヘルムは彼の後ろから叫んだ、「あなたはあの赤マントですね。本人でないとしても、少なくともその子孫に違いない。あなたが私から返礼を望まなかったのはあなたにとって幸運でしたよ。そんなことをしたら、大変な目にあわれたことでしょう。」

この不思議な男が去ると、すぐに昨日の世話役が入ってきた。彼はその日の昼食に招待する旨を伝えたが、それがまたかなり奇妙な響きであった。「バント（絆）が」と招待者ははっきりと言った、「客人を歓迎して昼食に招き、もっと仲良くなることを期待して喜んでいる」というのである。さらに客人の体調を気づかい、もてなしに満足しているかどうか尋ねた。ヴィルヘルムは出くわしたことすべてについて賞賛の言葉を述べることはできなかった。もちろん彼は、先ほどの無口な理髪師の場合と同様、不安とまでは言わずとも気になってしかたのなかった昨夜の恐るべき音のことを尋ねたかった。しかし自分の誓約を思いだしてどのような質問も自重し、焦らずとも、団体の厚意あるいは偶然から、自分の希望どおり教えてもらえるだろうと期待した。

友は一人になると、自分を招待させた不思議な人物のことを思ってみたが、どう考えてよいのかわからなかった。一人あるいは複数の指導者を「バント」という中性名詞で予告するのは、彼にはあまりに不可解だった。それにしてもまわりがあまりにも静かで、これ以上静まりかえった日曜日を経験したことはないと思えるほどであった。彼は建物を出た。鐘の音が聞こえたので、小さな町のほうへ向かった。ちょうどミサが終わり、押しあい出てくる町の住民や農夫たちのなかに、彼は昨日知りあった三人、つまり大工と石工と少年¹²⁾を見つけた。そのあとで彼は、プロテスタントの信者たちのなかに別の三人がいることに気づいた。他の人々がどのように礼拝を行なったかは明らかでないが、彼にあえて推測できたのは、この団体においては宗教の自由が確立しているということだった。

正午には世話役が城門で彼を出迎え、さまざまな部屋を通して大きな控

12) 2 稿では初稿に欠けていた不定冠詞が追加されている (ebd., S. 593)。

えの間に案内すると、そこに彼を座らせた。多くの人が通りすぎ、隣の大広間に入っていった。そのなかにはすでに知った顔も見られ、聖クリストフさえ脇を過ぎていった。誰もが世話役と新参者に挨拶をした。そのとき友の注意を一番ひいたのは、職人しかいないように思われることだった。誰もが普段どおりで、しかしきわめて清潔な身なりだった。ひょっとして役人筋の人間かと思えるような人物はほとんどいなかった。

これ以上おしかける客がいなくなったところで、世話役は私たちの友を堂々とした入口から広々とした大広間に案内した。そこには見渡しきれないほどの食卓が整っていた。その下座の端をすりぬけ上座のほうへ案内されると、上座に三人の人物が横並びに立っているのを見た。彼はどれほどの驚きにとらえられたことだろうか。彼が近づくと、まだ見分けもつかぬうちに、レナルドーが彼の首に抱きついてきたのである。この衝撃から立ちなおる間もなく、二人目が同じようにヴィルヘルムを熱烈にきつく抱きしめた。彼はナターリエの弟、あの風変わりなフリードリヒであることを明かした。友たちの歓喜は居あわせたすべての人々に伝染し、喜びと祝福の叫び声が食卓全体から響きわたった。しかし一同が着席すると瞬時にすべては静まりかえり、饗宴の食事はある種の厳粛さをもって運ばれ、そして食された。

食事が終わる頃、レナルドーが合図を送った。すると二人の歌い手が立ちあがり、ヴィルヘルムは自分の昨日の歌がくり返されるのを聞いてすっかり驚いた。話を続けるためにも、ここで再びその歌を挿入することが必要であろう。

山から丘へ

さらに下って谷間に沿えば

そこに響くは翼にのった

ゆらりさまよう歌の声。

疲れを知らぬ衝動に

続け喜び，続けよき知恵。
 汝の努力は愛にこそあれ，
 汝の人生は行為であれ。

この二重唱が，感じよく控えめな合唱に伴われ，終わりにさしかかろうとしたとき，向こう側で別の二人の歌手が勢いよく立ちあがった。彼らは深刻な激しさで，この歌をひき継ぐというよりは真逆のものに展開し，次のような歌が聞こえてきたので新参者は驚いた。

というも絆は裂かれ
 信頼は損なわれた。
 言うことも知ることもかなわぬ，
 いかなる偶然にさらされて
 私は今，別れ，今，さまようのか，
 寡婦のごとく嘆きに満ち
 別れてはまた誰かと連れあい，
 先へ先へと向かう身なのか！

合唱者の数はますます増えて力強くこの節に加わったが，食卓の末席から響く聖クリストフの声ははっきりと聞きわけることができた。ついに悲壮感がおそろしいほどに高まった。熟練した歌手たちのもとで，不機嫌な気分がフーガ（遁走曲）的な響きを歌全体にもたらし，私たちの友にぞっとするような印象を与えた。実際に誰もが心をひとつにして，出発を目前にした自分たちの運命を憂えているようだった。消えいりそうになりながらも歌は何度も息をふき返し，こうした不思議なくり返しを，ついにバンド自身も危険に感じるようになった。レナルドーが立ちあがると，全員がすぐに歌を中断し着席した。レナルドーはやさしく語りはじめた。「私たちみなにさし迫る運命に対していかなる瞬間にも対応できるよう，君たち

が常にその運命を心に思いいがっていることを、私は非難することはできません。生きるのに疲れた老人たちは『死を想え』とその仲間に叫びましたが、人生を楽しむ若い世代の私たちは、いつだって『遍歴することを想え』という朗らかな言葉で励ましあい、警告しあうことができるのです。このとき、私たちが進んで計画すること、あるいは余儀なくされていると信じることにについて、節度をもって朗らかに語りあうことは素晴らしいことです。私たちのあいだで何が確定し、何が流動的であるかを一番よく理解しているのは君たちです。このことについても、元気づけるような喜ばしい調子で楽しませてくれませんか。そのために、今回は別れの乾杯をしましょう。」そう言って彼は盃を飲みほし、再び席に着いた。すぐさま四人の歌い手が立ちあがり、調子を変えて、前に続くように歌いはじめた。

土地にしがみつくのはやめて
 思いきりよく始めよ、元気に飛びだせ！
 快活な力が頭に腕にみなぎれば
 いずこもわが家、
 陽の光を楽しめば、
 どんな悩みも消えていく。
 われらが世界に散らばるために、
 世界はこれほど広いのだ。

合唱の歌がくり返されるなか、レナルドーが立ちあがると、同時に全員が立ちあがった。彼の合図で、食卓をともにした仲間たちは一斉に歌いながら動きはじめた。下座の人々は、聖クリストフを先頭に二人ずつ組になって広間から出ていった。遍歴の歌が始まると、それはますます朗らかに、自由な調子になっていった。しかしとりわけその歌の聞きばえがしたのは、段々になった城の庭から¹³⁾ 広大な谷を見渡したときだった。人々は表情豊

13) 2稿では「人々が段々になった城の庭に集まり、そこから」に変更

かな谷間の優美さにわれを忘れてしまいたくなるほどであった。人々が思い思いにあちらこちらに散っていくうちに、ヴィルヘルムは三人目の指導者に紹介された。それは領地管理人であった。彼は、この団体がここに留まるのがよいと判断する限り、複数の貴族領のあいだにあるこの伯爵の城をあけ渡し、彼らにさまざまな便宜をはかることができた¹⁴⁾。

夕方になり、友たちがまわりを遠くまで展望できるあずまやに腰かけていると、かっぶくのよい人物が敷居に現われ、それが今朝の理髪師であることがわれわれの友にはすぐにわかった¹⁵⁾。男が無言で深々とおじぎをするのに対して、レナルドーは応えた。「君はいつものように非常に良いところに現れるなあ。さっそく君の才能で私たちを楽しませてくれたまえ。」「あなたに」と彼はヴィルヘルムに向きなおり、次のように続けた、「この結社について少しご説明できればと思います。そのバントであることに私は誇りをもつことができます。というのも、それぞれが活動する世界の利益や楽しみに資する才能を示すことなしには、誰も私たちの仲間になることはできないのですから。この男は立派な外科医です¹⁶⁾。理髪師としての彼の仕事ぶりについては、あなたご自身が証言してやることもおできになるでしょう。この才能によって彼は私たちにとって不可欠な存在となり、そして歓迎されているのです。しかしこの仕事は通常ひっきりなしのおし

(ebd., S. 596)。

14) 2 稿ではさらにこの管理人の説明が続いて、第 3 巻第 1 章が終わる (ebd.)。

15) ここから 2 稿では第 3 巻第 6 章冒頭となる (ebd., S. 632)。

16) 初稿は *Dieser Mann ist ein trefflicher Wundarzt*、2 稿では *Dieser Mann ist ein derber Wundarzt* (がっしりした外科医) に変更、さらに関係文「決断力や体力が必要とされる緊急事態で、立派に (trefflich) 師匠 (Meister) の助手を務めることができる」が追加される (ebd.)。師匠の指示のもとで刃物を扱う伝統的な「理髪外科医」として描く 2 稿の修正は、最新の専門教育を受けた新しい時代の外科医ヴィルヘルムとの相違を強調するためであろう。つまり初稿執筆の段階ではまだヴィルヘルムが外科医になることは想定されていなかったと考えられる。

ゃべりを伴い、それはしばしばうんざりするほどなのです。そこで彼は、自己修養のためにひとつの条件を甘んじて受け入れたのです。私たちの仲間として生活を希望する者はみな、他のことには比較的大きな自由が与えられていますが、あるひとつの方面からは自らを制限しなければなりません。そこでこの男は、何か日常的事や偶然生じたことを表現する際の言葉というものを放棄してしまいました。そうすることで、彼には別の種類の語りの才能が発達したのです。意図的に賢くそして楽しく人に働きかける語り、言ってみれば物語の才能です。

この男の人生は不可思議な経験にあふれています。それを彼は相応しいとはいえないときにしゃべり散らかしてきたのですが、今では沈黙を強いられたおかげで、静かに心のなかで反芻し、整理をしているのです。そこに想像力が結びつくと、それはできごとに命と躍動感を与えます。特別な技能と器用さで、彼は実話らしいおとぎ話、あるいはおとぎ話らしい実話を語ることができるのです。口を開くように私から促されると、彼はしばしば頃あいよく私たちをこの技で存分に楽しませてくれます。今もそうしたいのですが、それとともに、知りあつてかなりになるのに、彼がまだ一度も同じ話をくり返したことがないことを賞賛したいと思います。さあ、この度も、私たちの大切な客人に愛と敬意を示すために、彼がとりわけ優れた才能を示してくれることを期待しましょう。」

赤マントの男の表情に才気があふれ、顔一面に晴れやかさが広がると、彼はためらうことなく次のように語りはじめた¹⁷⁾。

[第14章終わり]

17) 2稿では続いて理髪師の語るノヴェレ「新しいメルジーン」が挿入され、ノヴェレの終わりとともに第3巻第6章が終わる。一方、初稿では次の第15章全体が「新しいメルジーン」となる。このノヴェレの初出は1817年版および1819年版『婦人年鑑』(1816年、1818年刊行)で、前半・後半に分けて公表された。『遍歴時代』とは関連づけられておらず、冒頭には序文がおかれ、物語が導入される状況はまったく異なっている。

今回の試訳について

今回訳出したのは初稿全 18 章の第 14 章で、2 稿の第 3 巻第 1 章および第 6 章の冒頭部分に対応している。

前章である第 13 章の最後で、資料の不確かさを訴える編集者が小説の語り手として前面に現れると、ヴィルヘルムとナターリエとの不思議な再会シーンがひとつのメールヒェンとして報告された。このエピソードはヴィルヘルムがナターリエに対する情熱を克服し諦念者に成長したことを象徴するもので、初稿『遍歴時代』の分岐点とすることができる。第 14 章は、旅が再び現実的な様相に戻ったことを告げて（「ここで私たちは再び、ある程度信頼のおける情報として地名を特定できる、確かな領地に足をふみ入れる」）開始される。ヴィルヘルムがノヴェレの登場人物たちと交流する前半部と異なり、ここからはノヴェレの世界の人物が諦念者たちの活動する枠の世界（遍歴組合の社会）に混じりあうことはなく、完全に切りはなされ、集いのなかで楽しめる物語として挿入される¹⁸⁾。

ヴィルヘルムはいよいよ諦念者として遍歴組合に合流し、レナルドー、そして『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795-96 年、以下『修業時代』）以来のフリードリヒと再会する。今回訳出した遍歴組合の人々の生活や活動の描写は、ほぼそのまま 2 稿に引き継がれているが、遍歴組合の活動理念は 2 つの稿のあいだで大きく変化している。

『修業時代』で塔の結社が掲げたアメリカ移住計画は、初稿第 16 章で

18) 両稿とも遍歴組合の世界で物語られるノヴェレは 3 つあるが、初稿では「新メルジーン」「気のふれたさすらいの女」「裏切り者はどこに」、2 稿では「新メルジーン」「危険な賭け」「度を超えるな」となり、「新メルジーン」以外は入れ替えが生じる。「気のふれたさすらいの女」と「裏切り者はどこに」は 2 稿では別の役割を担ってそれぞれ第 1 巻第 5 章、第 1 巻第 8、9 章（タイトルが「裏切り者は誰か」に変更される）に移され、代わって 2 稿が初出となるノヴェレ「危険な賭け」と「度を超えるな」が登場人物たちの前史として挿入される。

「気まぐれ Grille」・「妄想 Wahn」であったと否定され、今では塔の結社の人々もあらゆる移住を諦めて遍歴に身を捧げ、「あらゆる階級の有能で活動的な人間たちの活気のある大きな関係を促進」しようと活動していることが告げられる¹⁹⁾。「遍歴することを想え」と仲間呼びかけるレナルドーが、最終章で、土地所有でなく有用な活動にこそ価値があることを訴え、遍歴を称える演説を行なうと、今回訳出した遍歴の歌「土地にしがみつくのはやめて [……] われらが世界に散らばるために、世界はこれほど広いのだ」がくり返されるなか²⁰⁾、初稿『遍歴時代』は幕を閉じる。

一方、2稿では再びアメリカ移住計画が復活する。レナルドーの演説は、一字一句変わらず採用されながら、アメリカ移住者を募る演説に役割を変え(第3巻第9章)、さらに新たな選択肢として2稿で初登場するオドアルトが率いるヨーロッパ移住計画が加わり(第3巻第12章)、現在の土地に残留する第3のグループ²¹⁾も現れる(第3巻第16章)など、諦念者たちの組合は永遠の遍歴者として描かれるのではなく、多様な形で土地に根ざした新しい社会づくりをめざして世界に散らばっていく。

同様に、初稿では愛する人から引きはなされ明確な目的もなく遍歴を続けるヴィルヘルムも、2稿では早々に遍歴の義務を免除され、腰を落ちつけて専門教育に入り外科医をめざすことになる。ヴィルヘルムが外科医になることは、注16にも記したとおり、初稿執筆の段階では確定していなかったと考えられる。

19) Ebd., S. 199.

20) Ebd., S. 259.

21) 遍歴組合の滞在場所であった伯爵領に留まる第3のグループをとりまとめるのは、三人目の指導者、領地管理人である。注14に記したとおり、2稿では彼に関する描写が増える。